
きれいな月とよごれた空

Nayuta@001

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きれいな月とよびれた空

【Zコード】

Z7916C

【作者名】

Nayuta@001

【あらすじ】

町で起ころる連続殺人事件、巻き込まれた友人、七年前の謎の事故、親友の秘密…。高校生活一度目の夏は僕らにとって忘れられない季節となつた。

プロローグ

妹の誕生日は生憎の雨だった。

「お店が開いたら好きなケーキを選ぶんだぞ。」

冷たい雨は朝よつ多少激しさを増し、アスファルトを激しく叩いている。

「ホントに？ なんでもいいの？」

昨日までの暑さが嘘になるかのような気温せどても夏だとは思えないうらいだった。

「ああ。ホントになんでもいいよ。」

ボロボロの靴は雨水を大量に吸い込み、じわじわと足先から体温を奪っていたが、そんなことはほんの些細なことでしかなかつた。

とても嬉しかった。

何もかもがうまくいき、世界を変えられる気がした。

だから気付くべきだったんだ。いや、本当は気付いていて、ただ気付かないふりをしていただけなのかもしない。

「あ……」

一陣の風が吹き、運命の歯車がまわりだす。

強風に飛ばされる帽子

迫つてくる車

追い掛ける少女

スリップする車

届かない指先

止まらない車

「う、……あ

止まれと願つて止まるはさもなく、白い車はボンネットを紅色に染めて、大切なこの世界で一番大切なものを目の前で奪つていった。

1話・夏休みだ！

「えー……」Jがいつになると、グラフはこのよつた形になるわけで…。

「

4時間目、授業終了5分前。既に先生の話を聞いている生徒は数少なく、みなそわそわとチャイムが鳴るのを待っている。

「……早く終われよ……ってか、空氣読めよクソジジイ…。」

後ろの方から友人の不穏な発言が聞こえるが、みんな同じ気持ちなのだろう。誰も好き好んで夏休み前に授業なんか受けたくないはずだ。

「えー……それでは1学期の授業はこれで終わりとなります。先日配布したプリントを夏休みのうちにしっかりやっておいてください。二学期の始めにはテストをします。……それでは終わりにします。」「起立、礼。」

授業が終わり教室は一気に解放的な空氣に変わった。まあ、明日から夏休みと考えれば当然のことだろう。

「いやー、やつと地獄の数学が終わつたぜ。……ビーッした黎時？変な顔になつてゐるぞ。」

「お前に変な顔つて言われたくないよ、遊馬。相変わらず元気がいいな。」

オレの名前は鈴村黎時すずむらいりじで、N県、私立M高校の一年生である。ちなみに、オレに話し掛けている友人は長谷川遊馬はせがわますである。

「元気だけが取り柄だからな。それより食堂行こうぜ。ジュースくらいいなりね」ってやるよ。」

遊馬は考えがすぐに体に出るタイプで、とてもそわそわしている。

「落り着けよ。こへら夏休みになつたからって浮かれ過ぎだぞ。でも食堂つていうアイディアは悪くないな。」

「よーし。全は急げだ。」

遊馬は机のかばんを掴んで歩きだそうとしたがそれをオレは止めた。

「なんだよ。」

「お前、掃除は？」

「…………。」

遊馬は「ひひ」を振り向いたままの体制で固まつた。

「まつたく…。1学期最後の掃除くらいきちんとしろよ。」

「え〜。だつてめんじくさこじやん。」

遊馬は頭の後ろで腕をくみ口を尖らせ、ブーブー言つている。

「お前が面倒くさがらない事なんて、遊ぶことか食うことしかないじゃないか。ほら、オレも机運ぶの手伝つてやるから掃除しそうよ。」

遊馬はまだブーブー言つていたが、ロッカーからまつ毛を持つて渋々掃除を始めた。

それにも暑い。朝から開け放たれている窓からは蒸し暑い空気しか入つてこないし、さつきまでこの教室に30人以上の生徒が

すし詰めになつていたのである。Yシャツの下に着てこるTシャツはすでに汗を吸つて湿つていた。

「鈴村君、ありがと。」

「え？」

そんな暑い中、遊馬の掃除を手伝つて机を運んだりと後ろから誰かに礼を言われた。机を置いて振り返つてみるとクラス委員長の長瀬が立つていた。

「長谷川君つていつも掃除サボつてどっかいっちゃうんだもの。私が何度も注意してもまったく聞かないし。さすが鈴村君だね。」

委員長はとても感心したように尊敬の眼差しを一直線に向けてくる。何とも恥ずかしいものである。

「そんな礼を言わることはないよ。ほり、ちつといつ。遊馬が掃き終わったみたいだし」と掃除終わらせよう。

黎時は自分の近くに置いてあつたひとつを委員長に渡した。委員長は『うん』と書いて渡されたちつとりを受け取ると遊馬のほうに駆けていった。何だか彼女を見るととても微笑ほほえむのは俺だけだろうか。

「さて、俺も仕事を終わらせるかな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7916c/>

きれいな月とよごれた空

2010年10月14日13時44分発行